

南方熊楠全集

9

平凡社

南方熊楠全集（全一二卷）

第九卷 書簡Ⅲ

定価 二八〇〇円

昭和四八年 三月 一日 初版第一刷発行

著者 南方熊楠

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 一〇二

電話 二六五〇四五

振替 東京 二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 岡本文枝 1973

0339-429090-7600

凡 例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、随筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを期した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。

2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。

3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。

4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録、索引を付載する。

5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た↓あった 名く↓名づく 息ず↓息まず などのように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（恠↓怪 耻↓恥 咀↓詛 など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「」に対し小さい「」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、デ↓ジ ヅ↓ズ などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『』、論文名には「」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は・・・論文名は・・・に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあつて著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は（ハ）をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、〔著者書きこみ〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文または書簡の末尾に注記を付した。

本書（第九卷）は「書簡Ⅲ」とし、第七卷、第八卷に収録できなかった多方面にわたる南方熊楠の書簡を、岩田準一宛書簡・寺石正路等八氏宛書簡（民俗学関係）・進献進講関係書簡・白井光太郎宛書簡・植物学関係書簡として収録した。しかしなお収録すべき多くの書簡が残されている。たとえば膨大な数に上る上松菊宛書簡のほか、三田村玄竜（鳶魚）等出版関係者宛の書簡、雑賀貞次郎その他和歌山県の親戚・友人に宛てた書簡等がある。これらについては、本全集に別巻を二巻増巻するにあたって、その一巻の大部分をさいて収録する予定である。なお、それぞれの書簡の書かれた経緯、書簡を宛てられた人々の略歴等については、巻末の書簡解題を参照されたい。

収録した書簡については、原則として著者肉筆の原手簡を解読し、乾元社版『南方熊楠全集』に収録されているものについては、これを参照した。原手簡を入手し得なかったものも若干あるが、それらについても、乾元社版全集の編集に際して作製された写しをテキストにすることによって、省略されていた文章および挿図を復原した。

同一人に宛てられた書簡は年代順に配列することとし、日付のないものは内容等から判断した注記を付した。また葉書は、宛名および署名を省略し、日付のみを記して「葉書」と注記した。ただし、進献進講関係書簡は、宛名人別にせず、大正十五年および昭和四年に大別して、月日順に配列した。

例

凡

iii

原手簡のカタカナ・漢字混交文を、ひらがな・漢字混交文に改めたこと、匆卒の際の誤記または誤字と明らかに認められるものを、改めるか補注を付したこと、引用された書籍名の略称をあえて改めなかったこと等は、すべて第七卷「書簡Ⅰ」の凡例に記した通りであるが、引用された雑誌名および論文名は、検索に支障を生ずると判断されたものについては、正確な名称に改めるか補注を付した。

目

次

凡例

岩田準一宛書簡……………3

昭和六年……………14

昭和七年……………118

昭和八年……………162

昭和九年……………224

昭和十年……………250

昭和十一年……………256

昭和十二年……………267

昭和十三年……………282

昭和十四年……………303

昭和十五年……………322

昭和十六年……………327

寺石正路宛書簡……………333

宮武省三宛書簡……………377

杉田定一宛書簡	390
---------	-----

藤江義応宛書簡	394
---------	-----

水原堯榮宛書簡	401
---------	-----

谷井保宛書簡	415
--------	-----

宇野脩平宛書簡	418
---------	-----

六鷯保宛書簡	420
--------	-----

進猷進講關係書簡	435
----------	-----

大正十五年	437
-------	-----

上松蓊宛	437
平沼大三郎宛	443
上松蓊宛	447
平沼大三郎宛	453
服部広太郎宛	459

昭和四年	463
------	-----

服部広太郎宛	463
山田栄太郎宛	467
小畔四郎宛	471
山田栄太郎宛	479
上松蓊宛	481

小笠原誉至夫宛	484
山田信恵宛	487
上松蓊宛	487
山田信恵宛	489
古田幸吉宛	489

上松蓊宛	492
山田信恵宛	495

白井光太郎宛書簡	497
----------	-----

植物学關係書簡	531
---------	-----

六鶴保宛	533	平沼大三郎宛	54 ²	岡田要之助宛	54 ⁸	渡辺篤宛	553	小畔四郎宛	55 ⁸
部広太郎宛	563	上松蓊宛	573	今井三子宛	584	伊藤誠哉宛	589	北島脩一郎宛	594
本義数宛	604	桎山嘉一宛	611					江	服
男色考余談		稻垣足穂							
書簡解題									
	625		617						

南方熊楠全集
第九卷

岩田準一宛書簡

昭和六年八月八日夜十一時

中山太郎様

〔左に掲げる昭和六年八月八日付中山太郎宛書簡は、末尾に「この状このまま岩田氏へ御転致を願ひ上げ奉り候」とあるように、実質的には岩田準一宛の第一信というべきものである。すなわち、当時『犯罪科学』誌上に連載中の岩田の『本朝男色考』を高く評価した南方熊楠が、中山に岩田の住所を問い合わせたのに対し、中山が岩田は南方を訪問して教えを乞いたいと言っていると伝え、それに対してこの書簡が書かれた。中山からこの書簡の転致を受けた岩田は、同月十六日南方宛に第一信を送り、両者の文通が始まるのである。〕

南方熊楠再拝

拝啓。八月五日出御状、今朝八時半拝受。小生例の写生、解剖すこぶる多事にて、ようやく只今ひと切り切り上げ御状拝読致し候。

岩田氏の「男色史」〔「本朝男色考」特にその一部「室町時代男色史」〕は、ずいぶん綿密に調べたものにて、小生大いに感心致し候。しかしこんなことがある。友人三田村玄竜氏説に、荒木又右衛門が上野で仇討ちを仕遂げたとき刀を鐔本つばもとより折り飛ばせし、それをその地の何とかいう武士が荒木ほどの剣道家がそんなことをするとは手ぬかりの極みといいしと伝聞して、又右衛門さっそくその武士を訪問し、さらに剣道の極意を伝受せしとか。小生も岩田氏の取調べの綿密なるに感心すると同時に、全きを望むの念より次のごとく申し上げ候。

およそ男色と一概にいうものの、浄と不浄とあり。古ギリシアなどにはこれを別つことすこぶる至れり。（浄とは東洋で五倫の一とせる友道の極致に過ぎず。）これはギリシアの文学や哲学に道義学^{ドモセア}にこのことおびただしく載せあ

るから、古ギリシアの外にないもののように思う人多きも、東洋にも実ははなはだ多かりしなり。支那の例は只今しだ姑くおき、本邦にも古く浄愛を述べし物語もあり。徳川氏ころにも大坂で討死せし小笠原秀政は、小姓を愛するに貌をもつてせず、もっぱら心を見たるゆえに、討死の節旧く愛されたる小姓たちの侍はことごとく戦死し（死に場にあわざりしものは後より追腹切りしという）たりという。また『御前義経記』などにも、元禄ごろあずま男の意気地は元服以後も渝からぬ由を述べあり。さがさばいかほどもあるべし。

小生英國に到りしころ、仏人タージュの説に、男色の徒（被行者）はことごとく女化したるつまらぬもののように述べ、一同左様に心得おりたるに、高名の文士（英人）シモンズ、この人は男色に関係嗜好を有せず、本物専門ほんぶでいろいろと女に関する艶名も馳せた人なるが、『古ギリシア人の徳義の一問題』という小冊を私刊し、小生も持ちおれり。これは主として右のタージュの説を撃ちたるもので、被行者上りの偉人勇士等の伝を多く列し、男色は必ずしも肛門を犯すとか猥褻なことに限らざる由を述べ、何の不道德にあらざるもの多きのみならず、社会の様子によつては大いに世益ありしことと論ぜり。（ただし婦女同士のには、さまでの徳義も世益も発達せざりし由をちよつと述べあり。）と書き続けると、また長くなるから（今夜これよりまた朝まで鏡検を続けにやならぬゆえ）これでよすことと致すが、とにかく本邦でこのことを論ずる輩少しも浄と不浄を別たざるは、子を多く生んだ夫婦を多姪好姪と判ずるようなやりかたで、はなはだ正鵠を失し玉石混乱を免れずと思う。

さて小生先日、貴下へ岩田氏の宿所を問い上げしはそんなむつかしきことにあらず。さし当たり小生年代のものに周知のことで、今の若い人々には知れざると見え、岩田氏の書いたものにはなはだ玉に瑕ともいうべき謬りあるを見過ぎしがたくて、同氏へ告げたく思いしなり。しかし、これは貴下へ宛てたこの状に書くから、貴下より同氏へ御転報下されたく候。その件は、

今年八月一日の『犯罪科学』（二巻九号）九八頁に、細川政元が戸倉二郎に弑せられたことを『野史』より引きおる。

『野史』の文は、「永正四年六月、香西元長等、逆を謀り、政元を浴室に弑す。寵童の波々^{はかべ}伯部某、側にあり、変を見て走り出づ。ついにこれを斬るに、死なずして遁れ去る、云々」(『実録』、『武家譜』)、『実録』とは『国史実録』のこと。

白石先生の『読史余論』三に、四年六月二十三日夜、細川右京大夫政元その下人のために殺さる(四十、一本に四十二)。これは政元家人香西又六という者反謀ありて、政元が右筆戸倉という者に賂うて伺わしむ。政元愛宕精進のためとて今夕浴室に入りしを、戸倉殺せり。近習に、波々^{はかべ}伯部^{かべ}という者出合しを、これをも一刀刺してにげ去る。波々伯部は死なず。政元外法を修して子なし。下屋形讃岐守元勝が子六郎澄元を養子とす。(上略)頼之より已来、嫡流は管領たれば在京して上屋形という。頼之が弟詮春が後は阿州に在国せり。これを下屋形という。澄元、義澄を奉じて江州に奔る。香西等相議して、政元初め九条関白尚経の末子を養い、九郎澄之と名乗らせしを取り立て、嵐山城を構え籠る。七月、澄元兵を引いて上洛、三好筑前守長輝等兵を発して摂州より上り、京に入り、八月香西と戦う。波々伯部は先驅^{さきがけ}して終に戸倉^とを打つ。香西矢に中^{あた}りて死す。その党敗れて九郎澄之殺され、洛中静謐、澄元管領となる(十六歳)。これより三好頭わる。

これが普通に行なわれた説にて、小生その出所をしらべ一々控えおきたる物あれども、只今この部屋菌類の生品と乾燥品と顕微鏡やら薬品やらで歩む所なく、足悪きゆえ引き出し得ず、記憶のまま手の及ぶだけ棚より下ろして申し上ぐると、『南海通記』六に、「政元、飯綱の法を信じ、婦女を帶せず。少童を愛して愔氣深し。そのころ寵愛の上つ方あり。これに愔氣あつてややもすれば人を損ぜんとす。ここに右筆に戸倉次郎という者あり。罪なくして疑いを蒙りその適^{あた}を受くることあり。これによって逆心を含む」。

小生幼少のころから十五歳のころも、高野坊主に上使いと下使いと寵童を分かてり。ここにいえる上つ方はすなわち上使いの童と存じ候。『一話一言』に、『太閤出生記』とかいうものを引き、秀次最期のとき松若という草履